

研究報告

平安前期の複合辞・連語機能語（複合連語機能辞）の現代古典対照 ——『竹取物語』（2）「形態が全く異なるもの」——

学習院大学文学部 安部清哉

キーワード：複合辞、連語、複合機能辞、平安前期、現代語古典語対照、『竹取物語』

要旨：複合辞・連語研究の1つとして、『竹取物語』におけるいわゆる複合辞、連語、機能語などともいわれる複合表現形態（「複合連語機能辞」）を抜き出し、古文原文とその現代訳語とを対照させて分類し、古文の用例付き一覧として提示する。今回は「A 形態が現代語とほぼ同じもの、B 形態が一部同じもの」を取り上げた前稿の続編として、「C 形態が全く異なるもの」（例えば、ゆえの=にて、をもって=して）を取り上げた。

また、このような研究の発展として、現代語の「ことになる」と「ことになっている」に対応する古典語の形式は、「べし〜」（5例）、「こと〜」（4例）、「こそ〜已然形」（3例）等一定の形式と対応する傾向を解明できる可能性を指摘した。

○前稿＝安部ほか（2017）「【調査資料】平安前期の複合辞・連語機能語（複合連語機能辞）の現代古典対照——『竹取物語』での形態と用例——」『学習院大学国語国文学会誌』60、横 pp. (1) - (18)

（なお、研究PJの報告としての記載は、章末に追記した。）

1 はじめに

本稿で提示するのは、古典語と現代語とにおけるいわゆる複合辞、連語、機能語などともいわれる複合表現形態*の対照事例一覧である（*ここでは、仮に短い略称として、以下「複合連語機能辞」と記載する）。

古典語におけるそれらの「複合辞、連語、機能語」を、現代語と対照させつつ把握することで、従来の品詞単位での研究では遅れていたこれらの形態論的単位、語構成論的単位、語彙論的単位での形態群の共時的・通時的研究を促進するための試論であり、また、機械翻訳などの研究ヘデータを提供するための資料でもある。

複合連語機能辞の事例——従来の接続助詞・副助詞などの類から接続詞までを含み、さらに、「はじめとして、～ものゆえ、といえども、～たり～たり、に対して」などを対象とする。

ここではそのような試行的研究の1つとして、『竹取物語』における「複合連語機能辞」類（その一部）を、その現代語訳において該当する形態と対照させて用例と共に提示する。

なお、試験的な作業手順の関係で、具体的には『竹取物語』の現代語訳における「複合連語機能辞」を選び出し、それに該当する古典原文の当該形態とを対照させる、というかたちで提示している。その点では、厳密な意味・機能の現代語と古典語の対照というレベルよりは、検索・照合のための便宜的な一覧という段階であることをご了承ください。

なお、本稿では、「A 形態が現代語とほぼ同じもの、B 形態が一部同じもの」を取り上げた下記・前稿の続編として、「C 形態が全く異なるもの」（例えば、ゆえの=にて、をもって=して）を取り上げている。

○前稿＝安部ほか（2017）「【調査資料】平安前期の複合辞・連語機能語（複合連語機能辞）の現代古典対照——『竹取物語』での形態と用例——」『学習院大学国語国文学会誌』60、横 pp. (1) - (18)

2 「複合辞、連語、機能語」の研究

(前稿にて解説した内容は省略し、『竹取』に関する点のみ加筆して以下に記す。)

ここで『竹取物語』(以下、『竹取』と略す)を選択したのは、古代語でも平安前期の和文の文法を代表できる最初の資料と考えたからである。同時期の『伊勢物語』『大和物語』『平中物語』などの和歌が多い歌物語でもなく、前期後期の間にある『篁物語』『落窪物語』『宇津保物語』のように平安中期作品の『源氏物語』『枕草子』等に近似していく作品でもないものとして選択した。

なお、本文の『竹取』は旧日本古典文学大系(大系本)を使用し、現代語訳の方は新編日本古典文学全集(全集本)を使用した。

3 『竹取物語』の「複合連語機能辞」の分類と抽出手順

3-1 『竹取』での分類——「C 形態が全く異なるもの」(例えば、ゆえの=にて、をもって=して)

今回は『竹取』の「複合連語機能辞」を、仮に以下の4分類とした。AとBとの境界線は現段階では必ずしも厳密なものではない(便宜的恣意的分類とみていただいでよい)。

本稿では、紙幅の都合で、このうち、Cに分類した事例をあげる。A・B・Dは安部ほか(2017)参照。

- A 形態が現代語とほぼ同じもの(に向かって=に向ひて、ゆえ=ものゆゑ、など。音便や活用などによる古語としての形態の特徴は相違としないものを含む)
- B 形態が一部同じもの(からのち=のちに、のなら=ならば)
- C 形態が全く異なるもの(ゆえの=にて、をもって=して)
- D その他(意識、補訳など、古典原文中に該当箇所がないものなど)

3-2 「複合連語機能辞」の抽出手順

本稿では、現代語の方から該当する古典語を検索することを考えて提示しているものであり、以下のような作業手順によるものである。

- 『竹取物語』(旧日本古典文学大系原文)と、その現代語と対照させるための訳として新編日本古典文学全集の訳語とを対照させる。
- 現代語訳の方にある「複合連語機能辞」類を、現代語での諸研究を参照し、特に次の文献での語形を参考にして作成された「機能語一覧表」(付記の科研費により、高橋雄一氏・須田義治氏作成)によってリストアップする。
 - ◆日本語記述文法研究会編(2003-2010)『現代日本語文法 1~6』(くろしお出版)
- リストアップした現代語での「複合連語機能辞」ごとに、現代語訳での使用箇所を2、3か所抽出する。
- その現代語訳に該当する『竹取』の原文箇所を見つけ出し、該当する古典語の「複合連語機能辞」を同定する(同じく2、3か所)。
- 古典語の用例としてわかりやすい用例、また、現代語訳での「複合連語機能辞」と形態や機能がより対応している「現代語訳—古典語」用例を1組選択する。
- 現代語での「複合連語機能辞」と古典語での「複合連語機能辞」との対照見出しリストを作成する。
- 現代語と古典語とにそれぞれ当該の用例を付ける。
- 古典語の例文は、旧大系本の頁数行数を付す(例、大系 P59L9)。現代語訳部分(新編全集本が底本)に該当する旧大系本本文部分がない場合は、全集本の本文と頁数を示した。

このようにして、提示したのが、つぎのような対照例文である。1例を示す。

- はじめとして=はじめて

これを見て、使用人たちは、「やはりお悩みになることがあるにちがいない」とささやくが、親をはじめとして、だれもがその原因を知らない。

=これを、使ふ子ども、「なを物思す事あるべし」とさゝやけど、親をはじめて、何とも知らず。大系 P59L9.

実際には、他の作品と併行して行った作業の1つであって、用例も各々の機能辞ごとに数例抽出しており、また、「複合連語機能辞」も意味や機能ごとに分類されているような作業である。ここでは、本稿の形式にかかわる手順に限定して簡略に示した。

4 作成データベース（DB）による研究の発展

2作品『竹取物語』『夜半の寢覚』によって、接続機能語の意味・機能と語形形式ごとに、古典語用例とその現代語訳とを対照できるようにした対照一覧表を作成している。これをより多くの古典作品にて集積していくと、例えば以下のような傾向がわかるようになる。

細部は略すが、現代語の「ことになる」と「ことになっている」という連語に対応する古典語の形式を見ていくと、以下のようなものが対応していることがわかる。

○現代語連語—「ことになる」、「ことになっている」

○古典語連語—「べし〜」（5例）、「こと〜」（4例）、「こそ〜已然形」（3例）

（古典語連語の全形式一覧—「こそ〜すれ」（例：にこそ寄せんずれ）、断定形（終止形）（おろかなり）、「ことか」「ことかな」「ことに」「断定形」「なむとす」「にこそあれ」「べきことにか」「んずるぞ」「ことである」「ば（べければ）」「べき」「べけれ」「べし」「わざなり」

具体例を1組挙げると以下のようなものである。

用例（1）「ことになる」＝「こそ〜すれ」〈にこそ寄せんずれ〉

「ここで鳥ないては、六波羅は白昼にこそ寄せんずれ。いかがせん」⇔「ここで鳥が鳴いては、六波羅へは白昼に寄せることになる。どうしたらよかろう」『寢覚』

現代語の「ことになる」と「ことになっている」に対応する古典語の形式で、用例が多いものは、「べし〜」（5例）、「こと〜」（4例）、「こそ〜已然形」（3例）であり、対応には一定の傾向があることが明らかになる。現代語では消滅した「べし」の機能、係助詞「こそ」による表現は、現代語（近世以降か？）では「ことになる」「ことになっている」という表現が担うような機能であった、ということのをこれらは新たに教えてくれるわけである。

これらのような対応関係は、従来のような研究手法では見出せていないものであった。今後の研究が期待される領域と考える。

5 『竹取物語』の「複合連語機能辞」——C連語形態が現代語訳と全く異なるもの

この章には、「C 連語形態が現代語訳と全く異なるもの」（例えば、ゆえの=にて、ををもって=して）として分類されたものをあげる。もっとも、これらは、現代語訳の付け方によっては、A・Bとして分類した範疇と同じになることもあると考える。

一方、これらの中には、現代語には（前後の文脈によるため）なかなか同じような語句や表現では置き直せないもの、置き直しが難しいものが含まれていると考えられる。このC分類を立てて対照しておくことの意義は、そのような古典語と現代語との対応語句が見られない表現を探し出すことにもある。例えば、ある文脈における「む」「じ」等の意志表現や接続表現では対応する類似形式がない（A・Bにもある場合はあるが）。そのための分類でもあるので、このCの中をより詳細に分析して検討するのは今後の課題でもある。

なお、元データでは、機能・意味による分類と順番で配列されているものであるが、紙幅の都合のため、分類番号及び名称等は略し、語形のみを見出しとして掲げ、その配列順に羅列している。

凡例：掲載形式

○「現代語の見出し表現」＝「古典語の表現」／（改行）「現代語訳」（改行）＝古典語の該当箇所。」大系本の頁・行数

○がもとになって＝を～にて

中納言は、子供っばいことをして求婚の結末がついたことを、人に聞かせまいとなさっていたが、結局それが病(やまい)のもとになって、たいそう弱りなされたのである。

＝中納言は、わらはげたるわざして、病むことを、人に聞かせじとし給けれど、それを病にて、いと弱く成たまひにけり。大系 P53L2

○として＝さはありとも

翁が答えて言うには、「そんなことをなさってはいけない。叙爵(じよしやく)も、わが子を見申しあげなくては、何にならうか。それはそれとして、どうしてそんなに宮仕えをなさらないのか。どうしてまた死になさるわけがあるのですか」と言う。

＝翁いらふるやう、「なし給。官冠も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ。さはありとも、などか宮仕へをしたまはざらむ。死に給べきやう、やあるべき」と言ふ。大系 P55L15

○ままでも＝ても

「変化の人といっても、あなたは女の身を持っていらっしゃる。もつとも、このじじいのいる間は独身のままでもいらっしゃれましょうよ。

＝「變化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいますかりなむかし。大系 P32L5

○をもって＝して

りっぱな建物をお造りになって、漆(うるし)を塗り、蒔絵(まきえ)をもって壁をお造りになり、建物の上には、糸を染めていろいろの色彩に茸(ふ)かせ、屋内のしつらいは、言葉で言いあらわせないほど豪華な綾織物(あやおりもの)に絵を描き、柱と柱の間すべてに張ってある。

＝うるはしき屋を造り給て、漆を塗り、まきゑして、かべし給て、屋の上に糸を染めて色++に茸かせて、内のしつらひには、言ふべくもあらぬ綾をり物に繪をかきて、間毎に張りたり。大系 P46L8

○しなさい＝し給へ

かぐや姫に向って、姫が、「はやく、あの御使者(ごししや)にお会いしなさい」と言うと、かぐや姫は、「私はすぐれた容貌などではございません。どうして勅使(ちよくし)に見ていただけましょうか」

＝かぐや姫に、「はや、かの御使に對面し給へ」と言へば、かぐや姫、「よきかたちにもあらず。いかでか見ゆべき」と言へば、「うたてもの給ふかな。御門の御使をばいかでかおろかにせむ」大系 P54L5

○ままでは＝やうには

「かぐや姫を妻に据えるには、ふだんのままでは見苦しい」と大納言はおっしゃって、りっぱな建物をお造りになって、

＝「かぐや姫すへんには、例のやう、には見にくし」との給て、うるはしき屋を造り給て、大系 P46L7

○ゆえの＝にて

このようにたくさんのご家来をおつかわしくださり、私をおとどめさせなされましたが、避けることのできぬ

迎えが参り、私を捕えて連れてゆきますことゆえ、残念で悲しいことです。おそばにお仕え申しあげられなくなってしまいましたのも、このように常人とは異なつためんどうな体ゆえのことなのです
＝「かくあまたの人を賜ひて止めさせ給へど、許さぬ迎へまうで来て、とりいてまかりぬれば、くちおしく悲しき事。宮仕へ仕うまつらずなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。大系 P65L12

○をはじめ=をかみに

領有なさっている土地のすべて十六か所をはじめ、蔵の全財産を投じて、玉の枝をお作りになる。
＝しらせ給ひたる（かぎり）十六そを、かみにくどをあけて、玉の枝作り給ふ。かぐや姫のたまふや 大系 P36L1,

○ことに=して

としるしてあるのを見て、右大臣は、「なにをおっしゃる。あと、わずかな金のことだよ。それにしても、うれしいことに、よくまあ送って来てくれたな」とおっしゃって、唐土の方に向つて、伏し拝みなさる。
＝と言へるのを見て、「なに仰す。いま金すこしに（こそあなれ。かならずをくるべき物に）こそあなれ。嬉しくして、おこせたるかな」とて、唐の方に向ひてふし拝み給。 大系 P43L1

○ことに=いはく

かぐや姫が、翁に言うことに、「この皮衣を、火にくべて焼いても、焼けなければ、そのときこそ、『本物の火鼠の皮衣だろう』」と思つて、あの方のお言葉にも従いましょう。
＝かぐや姫、翁にいはく、「この皮衣は、火に焼かんに、焼けずはこそ、まことならめと思ひて、人の言ふことにも負けぬ。大系 P44L2

○ことには=やう

翁が言うことには、「私が毎朝毎晩見る竹の中にいらっしゃつたご縁で、あなたを知りました。
＝翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。 大系 P29L7

○とは=と

これを見つけて、翁が、かぐや姫に言うには、「私のたいせつな人よ。あなたは変化（へんげ）の人とは申しますものの、大変な大きさになるまで養ひ申しあげている私の気持はひととおりでありません。
＝これを見つけて、翁かぐや姫に言ふやう「我子の佛、變化の人と申ながら、こゝら大きさまで養ひたてまつる志をろかならず。翁の申さん事は聞き給ひてむや」
大系 P31L13

○なんて=だに

さて、皇居において、つねにおそば近く仕えている女性をご覧になると、かぐや姫のかたわらに寄ることのできそうな人なんて、とてもいなかった。
＝常に仕うまつる人を見たまふに、かぐや姫の傍に寄るべくだにあらざりけり。 大系 P58L2,

○など=～ばら

頸の玉を取つてしまえるだろう。おくれてやってくる家来どもなど、待つまい
＝「わが弓の力は、龍あらばふと射殺して、頸の玉は取りてん。をそく来る奴ばらを待たじ」大系 P47L2

○やら～やら=にも、～にも

そこらあたりの垣根近くやら、家の門の近くやらに、仕えている人たちでもそう簡単に見られようはずもないのに

=その邊りの牆にも、家のとにも、をる人だにたはやすく見るまじき物を、夜るは安きいも寝ず、闇の夜に出て、穴をくじり、かひばみまどひあへり。 大系 P30L9

○そのうえ=ども

「私は神ではないのだから、どんなことをしてさしあげられましようか。風吹き、浪(なみ)激しく、そのうえ、雷まで頭の上に落ちかかるようなのは、ふつうではなく、龍(たつ)を殺そうとさがしていらっしやるから、こうなっているのです。

=「神ならねば、なに業を仕うまつらむ。風吹き、浪激しけれども、かみさへ頂に落ちかゝるやう、なるは、龍を殺さんと求め給へばあるなり。 大系 P47L14

○これこそ=これや

そして、その山のように、高くうわしい。『これこそ私が求めている山であろう』とあってうれしくはあるが、やはり恐ろしく思われて、

=その山のさま、高くうわしい。これやわが求むる山ならんと思ひて、さすがに恐ろしくおぼえて、山のめぐりをさしめぐらして、大系 P38L6

○さえ=だに

「素直に、『この付近を通って歩くことさえ許せない』とおっしゃってくださいほうがまだままだのに」と

=「おいらかに、あたりよりだにな歩きそとやはのたまはぬ」と言ひて、 大系 P34L2

○でさえ=をだに

この人たちは、世間にいくらでもいる程度の女(ひと)でさえ、すこしばかり容貌(ようぼう)がよいという噂(うわさ)を聞くと、

=世中に多かる人をだに、すこしもかたちよしと聞きては、見まほしうする人どもなりければ 大系 P31L3,

○にさえ=て

そこらあたりの垣根近くやら、家の門の近くやらに、仕えている人たちでもそう簡単に見られようはずもないのに、夜は安眠もせず、見えるはずもない闇夜(やみよ)にさえ出かけてきて、垣根に穴をあけたりして、

=その邊りの牆にも、家のとにも、をる人だにたはやすく見るまじき物を、夜るは安きいも寝ず、闇の夜に出て、穴をくじり、大系 P30L10,

○すら=だに

かぐや姫が、「光はあるかしら」と見ると、螢ほどの光すらない。

=かぐや姫、光やあると見るに、螢ばかりの光だになし。 大系 P34L15

○だけ=かぎり

皇子は、「しごくこっそりと行くのだ」とおっしゃって、供人(ともびと)も多くは連れていらっしやらない。おそば近くお仕えている者だけを連れて出港(しゅく)なされた。お見送りの人々は、お送り申しあげて都へ帰った。

=皇子、「いと忍びて」とのたまはせて、人もあまた率(ひら)ておはしませず。近う仕ふまつるかぎりして、出給(しゅく)ひぬ。御をくりの人++見たてまつり送りて歸りぬ。大系 P35L12,

○だけ=ばかり

かぐや姫が答えて言うには、「そのような宮仕えは、まったく、いたすまいと思っておりますが、しいて宮仕えをおさせになるのなら、私は消え失(う)せてしまいたいという気持です。あなた様にご官位を賜るように宮仕え

をしておいて、あとはただ死ぬだけです。

＝翁喜びて、家に歸りてかぐや姫にかたらふやう、「かくなむ御門の仰せ給へる。なをやは仕うまつり給はぬ」と言へば、かぐや姫答へていはく、「もはら、さやう、の宮仕へ仕うまつらじと思ふを、しみて仕うまつらせ給はゞ消え失せなんず。御官冠つかうまつりて、死ぬばかり也」。大系 P55L14

○だけに＝にぞ

しぜん、かぐや姫のことばかりが御心にかかって、ただ一人で暮していらっしやる。理由もなくご夫人方のほうにもお渡りになられない。かぐや姫の御(おん)もとだけに御文を書いてお送りになる。お召しには応じなかったとはいえ、ご返事はさすがに情をこめてやりとりなさって、趣深く、季節ごとの木や草につけたりして、帝は歌を詠んでおつかわしになる。

＝かぐや姫のみ御心にかゝりて、たゞ獨り住みし給。よしなく御方々にもわたり給はず。かぐや姫の御もとにぞ、御文を書きて通はせ給。御返りさすがに憎からず聞え交し給て、おもしろく、木草につけても御歌をよみてつかはす。P58L4

○によって＝になむ

『ごもつともです。五人の方々はどうなとも優劣がつけがたくていらっしやるので、私の見たいものさえご用意くださればご愛情のほどがはっきりするでしょう。お仕えることは、その結果によって決めましょう』と言うので、私も、『それはよいことだ。そうすれば、他の人のお恨みもありますまい』と言いました」と言う。

＝「いづれも劣り優りおはしまさねば、御心ざしの程は見ゆべし。仕ふまつらん事は、それになむ定むべき」と言へば。これよき事也。人の御恨みもあるまじ」と言ふ。大系 P33L7,

○まま＝してなむ

帝は、かぐや姫を残してお帰りになることを、不満に思い、残念至極(しごく)にお思いになるけれども、しかたなく、魂をあとに残しとどめたような気持のまま、お帰りになったのである。

＝御門、かぐや姫を止めて歸り給はんことを、あかずくちおしく覺しけれど、玉しみを止めたる心地して、なむ歸らせ給ける。大系 P57L10,

○ままで＝ながら

「旅のご服装のままでいらっしやった」と言うので、翁(おきな)がお会い申しあげる。

＝「旅の御姿ながらおはしたり」と言へば、會ひたてまつる。大系 P36L9,

○ままに＝につけて

あるときは、風の方向のままに知らぬ国に吹き寄せられ、鬼のような怪物が目の前に立ち現れて、

＝ある時は、風につけて知らぬ国に吹き寄せられて、鬼のやう、なるもの出来て殺さんとしき。大系 P37L15

○ほど＝ばかり

このように「出発なされた」と人には見られるようにしておかれて、三日ほどたってから、船で帰っていらっしやった。

＝おはしぬと人には見え給て、三日ばかりありて漕ぎ歸り給ひぬ。大系 P35L14

○ほどの＝ばかり

かぐや姫の所には、「今日、天竺に石の鉢を取りに出発させていただきます」と知らせて、三年ほどののち、大和(やまと)の国十市(とおち)の郡(こおり)にある山寺の賓頭盧(びんずる)の前にある鉢(はち)の、真っ黒に煤墨(すすずみ)のついたのを取って、

＝かぐや姫のもとには、「今日なん天竺へ石の鉢とりにかかると聞かせて、三年ばかり、大和國十市の郡にある

山寺に、賓頭盧の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたるをとりて、錦の袋に入れて、大系 P34L10、

○ほどに＝ばかりに

この幼児は、育てるうちに、ぐんぐんと大きく成長してゆく。そして三か月ほどになるころに、一人前の大きさの人になってしまったので、髪あげの祝いなどをあれこれとして、髪あげさせ、裳(も)を着せる。
 =この兒、養ふ程に、すすくと大きになりまさる。三月ばかりになる程に、よき程なる人に成ぬれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。 大系 P29L14、

○ほどまで＝ばかり

いっぽう、竹取の翁(おきな)は、あれほどまで皇(み)子(こ)と意気投合していたことが、だまされていたのだからしかたがないとは思ふものぐあい悪く、眠ったような顔をしてすわっている。
 =竹取の翁、さばかり語らひつるが、さすがに覺えて眠りを。御子は立つもはした、居るもはしたにてゐ給へり。 大系 P40L14

○ほども＝ばかり

龍の毛一本すら動かさず奉ることはありますまい」と、誓願の詞(ことば)を放って、立ったり、すわったり、泣きながら神様に呼びかけなされることを、千度ほども申しあげなされた効果があったのだろうか、
 =毛の末一筋をだに動かしたてまつらじ」と、よ事をはなちて起ち居、泣々よばひ給事、千度ばかり申給ふけにやあらん大系 P48L2

○ほどをも＝とも

かぐや姫は、「おっしゃることは、どんなことでも、うけたまわらないことがありますか。変化(へんげ)の者であるとおっしゃいますわが身のほどをも知らずに、親とばかり思い申しあげておりますのに」と言う。
 =かぐや姫「なにごとをか、のたまはん事は、うけたまはらざらむ。變化の物にて侍けん身とも知らず、親とこそ思たてまつれ」と言ふ。翁「うれしくものたまふ物かな」と言ふ。 大系 P31L16、

○ほどを＝ばかり

中納言はお喜びになって、「おもしろい発言だなあ。すこしも知らなかったよ。すばらしいことを言ってくれた」とおっしゃって、忠実な家来たち二十人ほどを大炊寮につかわして、高い足場の上ののぼらせておかれた。
 =中納言喜び給て、「おかしき事にもあるかな。もつともえ知らざりつる。けうあること申たり」との給て、まめなる男ども甘んばかりつかはして、あなゝいにあげ据へられたり。 大系 P50L9

○～にしたがって＝ままた

と上申書に書いてあって、口でも、「当然いただくべきです」と言っているのを、聞いて、かぐや姫は、日が暮れるにしたがって、「皇子と契(ちぎ)らねばならぬか」と思い悩み、
 =と申て、「給はるべきなり」と言ふを聞きて、かぐや姫の、暮るゝまゝに思ひわびつる心地、わらひさかへて大系 P40L7

○につれて＝そへて (あるいは、て)

貝を取ることができなくなったことよりも、他人がこの話を聞いて笑うであろうことを、日がたつにつれてだんだんと気になさるようになったので、ただふつうに病気で死んでしまうよりも、外聞(がいぶん)が恥(か)ずかしいとお感じになるのであった。
 =貝をば取らずなりにけるよりも、人の聞き笑はんことを、日にそへて思ひ給ひければ、たゞに、病み死ぬるよりも、人聞き恥づかしくおぼえ給なりけり。大系 P53L4、

○と思うと=ことを

使用人たちも、何年もの間慣れ親しんで、気だてなども高貴でかわいらしかったことを見慣れているので、別れてしまうと思うと、恋しい気持がこらえきれそうになく、湯水も喉(のど)に通らないありさまで、翁、嫗と同じ心で嘆きあうのであった。

=使はるゝ人も、年頃ならひ、たち別れなむことを、心ばへなど貴やかにうつくしかりつる事を見ならひて、戀しからむことの耐へがたく、湯水飲まれず、同じ心になげかしがりけり。大系 P60L11,

○うちに=ほどに

この幼児は、育てるうちに、ぐんぐんと大きく成長してゆく。そして三か月ほどになるころに、一人前の大きさの人になってしまったので、髪あげの祝いなどをあれこれとして、髪あげさせ、裳(も)を着せる

=この兒、養ふ程に、すく++と大きになりまさる。三月ばかりになる程に、よき程なる人に成めれば、髪上げなどさうして、髪上げさせ、裳着す。大系 P29L14

○ながら=て

かぐや姫は、もう返歌もしなくなった。耳にも聞き入れなかったので、皇子は弁解、口実を口にしながら帰ってしまった。

=かぐや姫、返しもせずなりぬ。耳にも聞入ざりければ、言ひかゝづらひて歸りぬ。大系 P35L4

○とき=に

竹を取るとき、この子を見つけてからのちに竹を取ると、節(ふし)の両側にある空洞の一つ一つに、黄金(こがね)が入った竹を見つけることがたび重なった。

=竹を取るに、この子を見つけて後に竹とるに、節を隔てゝよごとに金ある竹を見つくる事かさなりぬ。大系 P29L12

○時=ほど

泣いて書く言葉は、私が、この人間の国に生れたというのであれば、ご両親様を嘆かせ奉らぬ時まで、ずっとお仕えすることもできましよう。

=うち泣きて書く言葉は、「此國にむまれぬるとならば、なげかせたてまつらぬほどまで侍らで過ぎ別ぬる事、返々本意なくこそおぼえ侍れ。大系 P64L14

○から=ば（已然形+ば）

「私は神ではないのだから、どんなことをしてさしあげられましようか。風吹き、浪(なみ)激しく、そのうえ、雷まで頭の上に落ちかかるようなのは、ふつうではなく、龍(たつ)を殺そうとさがしていらっしやるから、こうなっているのです。疾風(はやて)も龍が吹かせているのです。はやく、神様にお祈りなさってください」と言う。

=「神ならねば、なに業を仕うまつらむ。風吹き、浪激しけれども、かみさへ頂に落ちかゝるやう、なるは、龍を殺さんと求め給へばあるなり。はやてもりうの吹かする也。はや神に祈りたまへ」と言ふ。P47L15,

○ことから=よりぞ

「いや、そうではない。御眼(みまなこ)二つに、李のような玉をつけていらっしやったよ」と言うのと、「ああ、その李は食べがたい」と言ったことから、世間の道理に合わぬ、常識はずれのことを「あな、堪え(へ)がた」と言いはじめたのである。

=「いな、さもあらず。御眼二に、杏のやう、なる玉をぞ添へていましたる」と言ひければ、「あなたへがた」と言ひけるよりぞ、世にあはぬ事をば、あなたへがたとはいひはじめける。大系 P49L10

○ため=ば (已然形+ば)

きつく「いやだ」と言うため、強(し)いることができずにいるので、この期待も当然である。
 =この翁は、かぐや姫のやめなるを歎かしければ、人にあはせんと思ひはかれど、切にいなといふ事なれば、え強いねば、理也。大系 P44L2

○ので=ば (已然形+ば)

翁が言うことには、「私が毎朝毎晩見る竹の中にいらっしやったご縁で、あなたを知りました。竹の中にいらっしやったから、駄(だ)洒落(じやれ)で言うわけじゃないが、あなたは籠(こ)ではなく、私の子になる運命の人のようですよ」と言って、小さいので抱くこともならず掌(てのひら)に入れて、家へ文字どおり「持って」帰った。妻の嫗(おうな)にまかせて育てさせる。そのかわいらしいこと、この上もない。たいそう幼いので、そこはそれ、商売柄(あきんど)たくさんある籠(こ)の中に入れて育てる。
 =翁いふやう、「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給(ふ)べき人なめり」とて、手にうち入れて家(へ)持ちて来ぬ。妻の女にあづけて養はず。うつくしき事がぎりなし。いとおさなれば籠に入れて養ふ。大系 P29L8

○ゆえ=に

かぐや姫の言うには、「親がおっしゃることを、ひたすらにお断り申しあげることが気の毒ゆえ、あのように申しましたのに」と、取ることがむずかしい物であるのに、このように意外なほどにちゃんと持ってきたことを、いまいまく思う。翁は、もうすっかりその気になり、寝室の中を、調べ準備したりなどしている。
 =かぐや姫の言ふやう、「親のの給ことを、ひたぶるに辭(か)び申さん事のいとをしさに、取りがたき物を」。かくあさましくてもてきたる事をねたく思ひ、翁は聞(き)のうち、しつらひなどす。大系 P37L5,

○ものだから=ば (已然形+ば)

嫗も、平素は自分が産んだ子のようにしているが、このときばかりは、こちらが気がねさせられるぐらいにそっけないようすで言うものだから、自分の思いのままに強制もしかねる。嫗は、内侍のいる所に帰ってきて、「残念なことに、この小さい娘は、強情者(ごうじょうもの)でございまして、お会いしそうにもございせん」と申しあげる。内侍は、「かならずお会いしてこいのご命令がありましたのに。
 =むめる子のやう、にあれど、いと心恥(か)づかしげに、をろそかなるやう、に言ひければ、心のまゝにもえ責めず、内侍のもとに歸り出で、「くちおしく、このおさなきものは、こはくはべるものにて、對面(たいめん)すまじき」と申。「必ず見てまいれ、と仰事(おんじ)ありつるものを、大系 P54L10,

○たところ=ば (已然形+ば)

参内して、申しあげるには、翁「お言葉のもったいなさに、あの娘を入内(じゆだい)させようとつとめましたところ、『もし宮仕(みやまじ)えに差し出すならば、死ぬつもりです』と申します。
 =まいりて申やう、「仰(おん)の事をかしこさに、かの童(わらわ)を、まいらせむとて、仕(つか)うまつれば、宮仕(みやまじ)へに出し立てば死ぬべし、と申。大系 P56L7,

○たところ=たれば (已然形+ば)

また別の箱には不死(ふし)の薬(くすり)が入っている。一人の天人(てんじん)が言う、「壺(つぼ)に入っている御薬(ごやく)をお飲みください。穢(きたない)い地上(ちじょう)の物をお召(めい)し上がりになられたので、ご気分が悪いことでしょうよ」と言って、薬(くすり)を持ってそばに寄ったところ、姫(ひめ)はいくらかおなめになって、少しの薬(くすり)を、形見(かたみ)として、脱(だ)いで残(のこ)しておく着(き)物(もの)に包(つつ)もうとすると、そこにいる天人(てんじん)がこれを包(つつ)ませない。
 =又(また)あるは不死(ふし)の薬(くすり)入れり。ひとりの天人(てんじん)言(い)ふ、「壺(つぼ)なる御薬(ごやく)たてまつれ。穢(きたない)き所の物(もの)きこしめしたれば、御心地(ごんち)悪(わる)しからむ物(もの)ぞ」とて、もて寄(よ)りたれば、わづか嘗(か)め給(たま)ひて、すこし形見(かたみ)とて、脱(だ)ぎをく衣(い)に包(つつ)まんとすれば、

ある天人包ませず。大系 P65L4

〇と=に

そばに寄って見ると、竹筒の中が光っている。

=あやしがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。大系 P29L7

〇と=ば（已然形+ば）

翁は、気分が悪く苦しいときも、この子を見ると、苦しいこともなくなってしまう。腹立たしいこともまぎれてしまうのである。

=翁心地あしく、苦しき時も、この子を見れば、苦しき事もやみぬ、腹立たしきことも慰みけり。大系 P30L1,

〇なら=ば（已然形+ば）

しかし、もし、産地から天竺に、たまたま持って入国していることがあったなら、ひょっとしたら長者の家などをたずねて求め得ましょうよ。もし、どこにもない物であれば、使者に託して金をばお返し申しあげましょう。

=しかれども、もし天竺にたまさかにもて渡りなば、長者のあたりにとぶらひ求めむに、なき物ならば、使にそへて、金をば返したてまつらん」と言へり。大系 P42L4,

〇ようものなら=ましかば（or ましかば）

大納言が起き上がりすわって、おっしゃるには、「おまえたち、龍の頸の玉をよくぞ持ってこなかった。龍は空に鳴る雷と同類であったぞ。その玉を取ろうとして、たくさんの人々が殺されようとしたのである。まして、龍を捕えたりしようものなら、また、問題なく私は殺されていただらう。おまえたちも、よく捕えずにおいてくれたことだ。かぐや姫という大悪党めが、人を殺そうとして、こんな難題を出したのだった。

=大納言起きあてのたまはく、「汝らよくもて来ずなりぬ。龍は鳴る神のるいにこそありけれ。それが玉を取らむとて、そこらの人々の害せられなむとしけり。まして、龍を捕へましかば、又こともなく、我は害せられなまし。よく捕へずなりにけり。かぐや姫てう大盗人の奴が、人を殺さんとするなりけり。家のあたりだに、いまはとをらじ。男ども、なありきそ」とて、家に少し残りたりける物どもは、龍の玉を取らぬ者どもにたびつ。大系 P49L4,

〇でも=むに

かぐや姫が、翁に言うことに、「この皮衣を、火にくべて焼いても、焼けなければ、そのときこそ、『本物の火鼠の皮衣だらう』と思って、あの方のお言葉にも従いましょう。あなたは『この世にまたとない物で、くらべようがないから、それを疑うことなく本物だと思おう』とおっしゃる。

=かぐや姫、翁にいはく、「この皮衣は、火に焼かんに、焼けずはこそ、まことならめと思ひて、人の言ふことにも負けめ。世になき物なれば、それをまことと疑ひなく思はん、とのたまふ。大系 P44L3,

〇でも=なりとも

かぐや姫の言うには、「私の容貌(ようぼう)が美しいというわけでもありませんのに、相手の愛情の深さを確かめもしないで結婚して、あとで相手が浮気心をいただいたら、後悔するにちがいないと思うだけなのです。この上なくすばらしいお方(かた)でも、愛情の深さを確かめないでは、結婚しにくいと思っています」と言う。

=かぐや姫のいはく、「よくもあらぬかたちを、深き心も知らで、あだ心つきなば、後くやしき事もあるべきを、と思ふばかり也。世のかしこき人なりとも、深き心ざしを知らでは、あひがたしと思」と言ふ。大系 P32L9,

〇のに=ものを

そこらあたりの垣根近くやら、家の門の近くやらに、仕えている人たちでもそう簡単に見られようはずもないのに、夜は安眠もせず、見えるはずもない闇夜(やみよ)にさえ出かけてきて、垣根に穴をあけたりして、中をの

ぞき、うろうろしている。そのときから、あの「よばい」という言葉ができたのである。

=も、いかでこのかぐや姫を得てしがな、見てしがなと、をとに聞きめでまどふ。その邊りの牆にも、家のもとにも、をる人だにたはやすく見るまじき物を、夜は安きいも寝ず、闇の夜に出て、穴をく
P30L11, じり、かひばみまどひあへり。さる時よりなむ、よばひとは言ひける。大系 P30L10,

○だからといって=さりとして

これを、帝がご覧になり、歌のすばらしさに、いっそうお帰りなさる場所もないようなお気持ちになられる。御心(みこころ)では、まるで帰ろうともお思いにならなかったのであるが、だからといって、ここで夜をお明かしになることができるはずもないので、しかたなくお帰りになった。

=これを、御門御覽じて、いかゞ歸り給はんそらもなく思さる。御心は、さらにたち歸るべくも思されざりけれど、さりとして、夜をあかし給べきにあらねば、歸らせ給ぬ。大系 P57L16

○たところが=たりしかば

仕えている人が言うには、「皮は、火にくべて焼いてみたところが、めらめらと焼けてしまったので、結局、かぐや姫は結婚なさらなかったのだ」と言ったのであるが、これを聞いてから、遂行できなくてがっかりというような場合を、「阿倍」にちなんで、「あえ(へ)なし」と言うようになったのである。

=ある人のいはく、「皮は火にくべて焼きたりしかば、めら+と焼けにしかば、かぐや姫あひ給はず」と言ひければ、これを聞きてぞ、とげなき物をば、あへなしと言ひける。大系 P44L16,

○たところで=たりとも

しかし、そうはいっても、この女と結婚しないではこの世に生きていられそうもない気持がしたので、「天竺(てんじく)にある品物でも、持ってこられないことがあろうか」と、いろいろ考えて、石作の皇子は、見通しのきく人であったので、「いやいや、天竺にも二つとない鉢を、百千里の距離を行ったところで、どうして取ることができようか」と思って、

=猶、この女見では、世にあるまじき心地のしければ、天竺にある物ももて来ぬ物かほと思ひめぐらして、石つくりの皇子は、心のしたくある人にて、「天竺に二となき鉢を、百千萬里の程行きたりとも、いかでかとるべき」と思ひて、大系 P34L8

○ものの=ど

もうどうにもならぬと苦しい心を歌に吐露して送るのだが、やはりききめがない。だから、何をしてもききめがないと思うものの、あきらめもせず、十一月、十二月の雪が降り氷が張るときにも、六月の真夏の太陽が照りつけ雷(かみなり)がはげしく鳴りとどろくときにも、休まずにやってきている。

=文を書きてやれど、返事せず。わび歌など書きておこすれども、かひなしと思へど、霜月しはすの降り凍り、みな月の照りはたたくにも障らずあたり。この人々、ある時は竹取を呼び出て「娘を吾にたべ」と、ふし拜み、手をすりのたまへど「をのがなきぬ子なれば、心にも従はずなんある」と言ひて、月日すぐす。大系 P31L6

○(言う) ことには=やう

翁が言うことには、「私が毎朝毎晩見る竹の中にいらっしゃったご縁で、あなたを知りました。竹の中にいらっしゃったから、駄(だ)洒落(じやれ)で言うわけじゃないが、あなたは籠(こ)ではなく、私の子になる運命の人のようですよ」と言って、小さいので抱くこともならず掌(てのひら)に入れて、家へ文字どおり「持って」帰った。

=翁いふやう「我あさごと夕ごとに見る竹の中におはす我あさごと夕ごとに見る竹の中におはするにて、知りぬ。子となり給(ふ)べき人なめり」とて、手にうち入れて家持ちて来ぬ。妻の女にあづけて養はず。うつくしき事かぎりなし。いとおさなければ籠に入れて養ふ。大系 P29L8

○（言う）ことには=いはく

かぐや姫の言うことには、「どうしてまた、結婚などをするのでしょうか」と言うと、翁は「変化の人といって、あなたは女の身を持っていらっしゃる。もつとも、このじじいのいる間は独身のままでいらっしゃれましようよ。

=かぐや姫のいはく「なむでうさることかし侍らん」と言へば「変化の人といふとも、女の身持ち給へり。翁のあらむ限りは、かうてもいますかりなむかし。 大系 P32L5

○がもとになって=よりぞ

あの偽(にせ)の鉢を捨ててからも、また、あつかましくも、「頼(たの)まるるかな」などと言ったことがもとになって、あつかましいことを、「はじ(ぢ)をすてる」と言うのであった。

=かの鉢を捨てて、又言ひけるよりぞ、面なき事をば、はぢを捨てとは言ひける。大系 P35L4

○とおり=やうにも

あの愁訴(しゆうそ)をした工匠(たくみ)を、かぐや姫が呼んで庭に控えさせ、「うれしい人たちですよ」と言って、ご褒美をたいそう多くお与えになる。工匠どもはたいそう喜んで、「期待していたとおりだった」と言って、帰る。

=かのうれへをしたる匠をば、かぐや姫呼びすへて、「うれしき人どもなり」と言ひて、祿いと多くとらせ給。匠らしみじく喜び、「思ひつるやう、にもあるかな」と言ひて、歸る道にて、くらもちの皇子、血の流るゝまで調整させ、給。 大系 P41L2,

○っばい=げたる

中納言は、子供っばいことをして求婚の結末がついたことを、人に聞かせまいとなさっていたが、結局それが病(やまい)のもとになって、たいそう弱りなされたのである。

=中納言は、わらはげたるわざして、病むことを、人に聞かせじとし給けれど、それを病にて、いと弱く成たまひにけり。大系 P53L2,

○げ=たる

「どんな気持がするので、このように物思わげなようすで、月をご覧になるのですか。このすばらしい世の中に」と言う。

=「なんでう心地すれば、かく、物を思ひたるさまにて、月を見たまふぞ。うましき世に」と言ふ。大系 P59L1

○んばかりに=やうに

波は幾度も船にうちかかって海中に巻き入れんばかりになり、雷(かみなり)は落ちかかるようにひらめきかかるので、大納言(だいなごん)は当惑して、

=疾き風吹きて、世界暗がりて、舟を吹もてありく。いづれの浪は舟にうちかけつゝ捲き入れ、神は落ちかゝるやう、にひらめく。かゝるに、大納言まどひて、大系 P47L6,

○かねる=えへず

このときばかりは、こちらが気がねさせられるぐらいにそっけないようすで言うものだから、自分の思いのままに強制もしかねる。

=むめる子のやう、にあれど、いと心恥づかしげに、をろそかなるやう、に言ひければ、心のまゝにもえ責めず。大系 P54L10

○てはいけない=なしたまひ

翁が答えて言うには、「そんなことをなさつてはいけない。叙爵(じよしやく)も、わが子を見申しあげなくなつては、何にならうか。それはそれとして、どうしてそんなに宮仕えをなさらないのか。どうしてまた死になさるわけがあるのですか」と言う。

=翁いらふるやう、「なし給(ひ)。官冠も、わが子を見たてまつらでは、何にかはせむ。さはありとも、などが宮仕へをしたまはざらむ。死に給べきやう、やあるべき」と言ふ。大系 P55L15

○ことだ=けり

家の人たちに何か言うだけでもと思つて、言葉をかけてみるが、相手は問題にしない。それでも近辺を離れぬ貴公子たちは、相変らずそこで夜を明かし日を暮す者が多い。しかし、いっぽう熱意のそれほどでもない人は、「むだな行動はつまらないことだよ」と思つて、しだいに来なくなったのである。

=家の人どもに物をだに言はんとて、言ひかゝれどもことゝもせず。あたりを離れぬ君達、夜をあかし日をくらす、多かり。をろかなる人は、「ようなきあきは、よしなかりけり」とて、來ず成にけり。大系 P30L15,

○だろう=けむ

お邸(やしき)の執事(しつじ)や、お仕えている人々が、みな手分けをしておさがし申しあげたが、あるいはお亡くなりにもなったのだろうか、見つけ申しあげぬままになってしまった。それは、皇子が、恥ずかしくて、ご家来の前から自分の姿をお隠しにならうと思つて、何年もの間、姿をお見せにならないのであったよ。

=宮司、候ふ人々、みな手を分ちて求めたてまつれども、御死にもやしたまひけん、え見つけたてまつらざりぬ。御子の御供にかし給はんとて、年頃見え給はざりけるなりけり。大系 P41L8,

○だろう=む

かぐや姫が、翁に言うことに、「この皮衣を、火にくべて焼いても、焼けなければ、そのときこそ、『本物の火鼠の皮衣だろう』と思つて、あの方のお言葉にも従いましょう。あなたは『この世にまたとない物で、くらべようがないから、それを疑うことなく本物だと思おう』とおっしゃる。でも、やはり、これを焼いて、本物かどうか確かめてみたいと私は思うのです」と言う。

=かぐや姫、翁にいはいはく、「この皮衣は、火に焼かんに、焼けずはこそ、まことならめと思ひて、人の言ふことにも負けぬ。世になき物なれば、それをまことと疑ひなく思はん、とのたまふ。猶これを焼きて心みん」と言ふ。大系 P44L3,

○ようだ=(こそ+)なり

石上(いそのかみ)の中納言には、「燕(つばめ)の持っている子安貝(こやすがい)を取つて下さい」と言う。翁は、「どれもみな、むずかしいことのようだなあ。この日本にあるものでもない。こんなにむずかしいことを、どのように申しましようか」と言う。かぐや姫が、「どうしてむずかしいことがありましよう」と言うので、翁は、「とにかく、申しあげてみよう」と言つて、出てきて、「このように申しております。娘の申すようにお見せください」と言うので、皇子たちと上達部(かんだちめ)はこれを聞いて、

=いそのかみの中納言には、燕のもたる子安のかいひとつとりて給へ」と言ふ。翁、「かたき事どもにこそあなれ。この國にある物にもあらず。かかたき事をば、いかに申さむ」と言ふ。かぐや姫、「何かかたからん」と言へば、翁、「とまれかかまれ申さむ」とて、出て、「かくなむ。聞ゆるやう、に見せ給へ」と言へば、御こ達、上達部聞きて、大系 P33L14,

○とかいう=といふなる (「らしい」の部分は意識)

右大臣阿倍御主人(あべのみうし)は、財産が豊かで、一門が繁栄している人であったのである。その年にやつてきて関係ができていた唐土(もろこし)の貿易船の王けいという人のもとに手紙を書いて、「火鼠(ひねずみ)の皮

とかいう物が、そちらにはあるらしいが、買って届けてくれ」と書いて、お仕えしている人の中から、心のしつかりしている者を選んで、選ばれた小野房守(おののふさもり)という人に手紙を持たせて派遣する。

＝右大臣あべのみむらじは、たから豊かに、家ひろき人にぞおはしける。その年きたりける唐船の、わうけいと
いふ人のもとに、文を書きて、火鼠の皮といふなる物買ひておこせよとて、仕うまつる人の中に心たしかなるを
選びて、小野のふさもりといふ人をつけて遣はす。大系 P41L15,

○らしい＝らむ

かぐや姫の言うには、「どれほどの深い愛情を見たいと言いましょうか。ほんの少しのことなのです。この五人の方々愛情は、同程度のようにうかがわれます。このままでは、どうして、五人の中での優劣がわかりましようか。五人の中で、私が見たいと思う品物を目の前に見せてくださる方に、ご愛情がまさっているとして、お仕えいたしまししょうと、その、そこにいらっしゃるらしい方々に申しあげてください」と言う。翁は「結構だ」と承知した。

＝かぐや姫のいはく、「なにばかりの深きをか見んと言はむ。いさゝかの事也。人の心ざし等しかん也。いかでか、中に劣り優りは知らむ。五人の中に、ゆかしき物を見せ給へらんに、御心ざしまさりたりとて、仕うまつらんと、そのおはすらん人々に申給へ」と言ふ。「よき事なり」と承けつ。大系 P32L15,

○まい＝まじ

「私が、姫に、『じじいの命は今日明日ともわからぬのだから、こうまでおっしゃる若殿方に、よく考え定めてお仕え申しあげよ』と申しますと、姫も、『ごもつともです。五人の方々はどうなとも優劣がつけがたくていらっしゃるので、私の見たいものさえご用意くださればご愛情のほどがはっきりするでしょう。お仕えすることは、その結果によって決めましよう』と言うので、私も、『それはよいことだ。そうすれば、他の人のお恨みもありますまい』と言いました」と言う。

＝「翁の命、今日明日とも知らぬを、かくのたまふ君達にも、よく思ひ定めて仕ふまつれ」と申もことはり也。
「いづれも劣り優りおはしまさねば、御心ざしの程は見ゆべし。仕ふまつらん事は、それになむ定むべき」と言へば。これよき事也。人の御恨みもあるまじ」と言ふ。大系 P33L8

○まい＝じ

大納言は、「ばかなことを言う船人だなあ。何も知らないであんなことを言っている」とお思いになって、「私の弓の力からすれば、龍がいたら、さっと射殺して、頸の玉を取ってしまえるだろう。おくれてやってくる家来どもなど、待つまい」とおっしゃって、船に乗り、龍をさがしにあちこちの海をおまわりになるうちに、たいそう遠いことだが、筑紫(つくし)の方の海にまで漕(こ)ぎ出しなされた。

＝「をぢなき事する舟人にもあるかな。え知らでかく言ふ」と思ひ、「わが弓の力は、龍あらばふと射殺して、頸の玉は取りてん。をそく来る奴ばらを待たじ」との給て、舟に乗りて海ごとにありき賜に、いととをくて、筑紫の方の海に漕ぎ出ぬ。大系 P47L2,

○はずがない＝むや

姫は塗籠(ぬりごめ)の中でかぐや姫を抱えてじつとすわっている。翁も、その塗籠の戸を閉ざして戸口にすわっている。翁の言うには、「これほどまでに守っている所なのだから、天人にも負けるはずがない」と言って、建物の上にいる人々に言う、「何物かが、ちょっとでも、空に走ったならば、さっと射殺(いころ)してください」。

＝女、塗籠の内に、かぐや姫を抱へてをり。翁、塗籠の戸をさして、戸口にをり。翁のいはく、「かばかり守る所に、天の人にも負けむや」と言ひて、屋の上をる人々にいはく、「つゆも、物空にかけらば、ふと射殺し給へ」。大系 P61L13

○ということだ=となり（となり？と？）

世間の人々は、「阿倍(あべ)の大臣が火鼠(ひねずみ)の皮衣を持っていらっしゃって、かぐや姫と結婚なさるということだな。ここにおいでになるのか」などと問う。仕えている人が言うには、「皮は、火にくべて焼いてみたところが、めらめらと焼けてしまったので、結局、かぐや姫は結婚なさらなかったのだ」と言ったのであるが、これを聞いてから、遂行できなくてがっかりというような場合を、「阿倍」にちなんで、「あえ（へ）なし」と言うようになったのである。

=世の人++、「あべの大臣、火ねずみの皮衣もていまして、かぐや姫にすみ給ふとな。こゝにやいます」など問ふ。ある人のいはく、「皮は火にくべて焼きたりしかば、めら++と焼けにしかば、かぐや姫あひ給はず」と言ひければ、これを聞いてぞ、とげなき物をば、あへなしと言ひける。大系 P44L15

○このことだ=なる

竹取の翁は、泣く泣く申しあげる、「この十五日に、月の都から、かぐや姫を迎えるために参り来るとのことです。恐れ多くもおたずねくださいました。この十五日には、ご家来衆を賜って、月の都の人がやってきたならば、捕えさせましょう」と申しあげる。

=翁にいはく、「いと心苦しく物思ふなるは、まことか」と仰せ給。竹取泣く++申。「この十五日になん、月の都より、かぐや姫の迎にまうで来なる。たうとく問はせ給。この十五日は、人々賜はりて、月の宮この人まうで来ば、捕へさせん」と申。大系 P61L3

○ことだ=けり

家の人たちに何か言うだけでもと思つて、言葉をかけてみるが、相手は問題にしない。それでも近辺を離れぬ貴公子たちは、相変らずそこで夜を明かし日を暮す者が多い。しかし、いっぽう熱意のそれほどでもない人は、「むだな行動はつまらないことだよ」と思つて、しだいに来なくなったのである。

=家の人どもに物をだに言はんとて、言ひかゝれどもことゝもせず。あたりを離れぬ君達、夜をあかし日をくらす、多かり。をろかなる人は、「ようなきあきは、よしなかりけり」とて、来ず成にけり。大系 P30L15,

○ものか=やはへべき

「この女の計略に負けられようか」とお思いになられて、竹取の翁(おきな)を召し出されてご命令を出される、「おまえが持っているかぐや姫を献上せよ。容貌(ようぼう)がすぐれているとお聞きになって、御使いをつかわしたが、その甲斐(かい)もなく、得ることができないままになった。このようにうまくゆかぬ状態のままにしておいてよいものか」とおっしゃる。

=この女のたばかりにや負けむ、と思して、仰せ給、「汝が持ちて侍るかぐや姫たてまつれ。顔かたちよしときこしめして、御使をたびしかど、かひなく見えず成にけり。かくたい※※しくやは習はすべき」と仰せらる。大系 P55L5

○ことか=(し)けむ

ところが、どうしたことか、疾風(はやて)が吹きだし、あたり一面暗くなって、船を翻弄(ほんろう)する。どちらの方角ともわからず、ただもう海の中に没してしまうほどに風が船をきりきり舞いさせ、波は幾度も船のうちかかって海中に巻き入ればかりになり、雷(かみなり)は落ちかかるようにひらめきかかるので、大納言(だいなごん)は当惑して、「こんな苦しい目に遭ったことは、まだない。どうなるのだ」とおっしゃる。

=いかゞしけん、疾き風吹きて、世界暗がりて、舟を吹もてありく。いづれの方とも知らず、舟を海中にまかり入ぬべく吹きまはして、浪は舟のうちかけつゝ捲き入れ、神は落ちかゝるやう、にひらめく。かゝるに、大納言まどひて、「またかゝるわびしき目見ず。いかならんとするぞ」と、の給ふ。大系 P47L5,

○つもりだ=む

「私の身は、もしこの国に生れたものでございましたならば、宮仕えさせることもおできになるでしょうが、そうではございませんので、連れていらっしゃるのは、とてもむずかしゅうございましょう」と奏上する。帝は、「どうしてそのようなことがあろう。やはり、連れておいでになるつもりだ」とおっしゃって、御輿(おんこし)を邸(やしき)にお寄せになると、このかぐや姫は、急に影のようになって姿を消してしまった。

=「をのが身は、此國にむまれて侍らばこそ使ひ給はめ、いといておはしましがたくや侍らん」と奏す。御門、「などかさあらん。猶いておはしまさん」とて、御輿を寄せ給に、このかぐや姫、きと影になりぬ。大系 P57L2,

○もしない= (だに?~) なでなむ

ほんとうに仏(ほとけ)の大願力(だいがんりき)のおかげでありましょうか。昨日、難波(なにわ)から都へ帰参したのです。まったく脱ぎ替えもしないで、こちらに直接参上しました」

=大願力にや、難波より、昨日なん都にまうで來つる。衣をだに脱ぎかへなでなん、こちまうで來つる」大系 P39L5,

○とともに=ままに

この皇子は、「いまとなってまで、あれこれ言うべきではない」と言うとともに、縁側に這(は)いのぼりなさった。翁(おきな)はもつともだと思っている。

=この皇子「いまさへ何かと言ふべからず」と言ふまに、縁にはひ上り給ぬ。翁、理に思ふに、「この國に見えぬ玉の枝なり。この度はいかでか辭び申さむ。様もよき人におはす」大系 P37L2,

○する(しようとする)=む

「何にお使いになるのですか」と申しあげる。中納言が答えておっしゃるには、「燕が持っている子安貝(こやすがい)を取ろうとするためである」とおっしゃる。

=「何の用にかあらん」と申。答へての給やう、「燕のもたる子安の貝を取らむ料也」とのたまふ。大系 P50L1,

○おかげで=に

山はかぎりなくすばらしい。そのさまは、まったくこの世の物にたとえもできぬほどでしたが、この枝を折ってしまいましたので、ただもう落ち着かなく、船に乗って、追い風が吹いて、四百余日で、帰って参りました。ほんとうに仏(ほとけ)の大願力(だいがんりき)のおかげでありましょうか。昨日、難波(なにわ)から都へ帰参したのです。潮(しお)で濡(ぬ)れた衣をも、まったく脱ぎ替えもしないで、こちらに直接参上しました」とおっしゃると、

=山はかぎりなくおもしろし。世にたとふべきにあらざりしかど、此枝をおりてしかば、心もとなくて、舟に乗りて、追風吹きて、四百餘日になむまうで來にし。大願力にや、難波より、昨日なん都にまうで來つる。さらに潮に濡れたる衣をだに脱ぎかへなでなん、こちまうで來つる」とのたまへば、大系 P39L4,

○につき=こと

このようにたくさんのご家来をおつかわしくださり、私をおとどめさせなされましたが、避けることのできぬ迎えが参り、私を捕えて連れてゆきますことゆえ、残念で悲しいことです。おそばにお仕え申しあげられなくなってしまいましたのも、このように常人とは異なつためんどうな体ゆえのことなのです。わけのわからぬこととお思いになられたことでしょうか。私が強情にご命令に従わなかつたことにつき、無礼な奴(やつ)めとお心におとどめなさっていることが、今も心残りになっております。

=「かくあまたの人を賜ひて止めさせ給へど、許さぬ迎へまうで來て、とりいてまかりぬれば、くちおしく悲しき事。宮仕へ仕うまつらざるなりぬるも、かくわづらはしき身にて侍れば。心得ず思しめされつらめども、心強くけたまはらずなりにし事、なめげなる物に思しめし止められぬるなん、心にとどり侍りぬる」大系 P65L10

【使用資料】

- 古文原文：旧日本古典文学大系
- 現代語訳：新編日本古典文学全集。

【付記1】

- ①本稿は、次の研究費による研究成果の一部である。
- 2016年度学習院大学計算機センター特別研究プロジェクト「日本古典語（平安和文資料）の複合型接続機能辞の通時的研究」（代表：安部清哉）
- ②次のゼミ学生の協力を得たことを記し感謝申し上げる。
江口匠（学習院大学大学院 2017年3月修了）
大浜弘樹（学習院大学文学部 2017年3月卒業生）
菊池そのみ（学習院大学学部 2017年3月卒業生、現在・筑波大学大学院一貫制博士課程1年）

【付記2】付記1の研究プロジェクトの内容・成果を以下に略記し報告に代える。

計算機センター2016年度特別研究プロジェクト（Bプロジェクト）（代表：安部清哉）

「日本古典語（平安和文資料）の複合型接続機能辞の通時的研究」

1 研究の目的

日本語の語彙の史的な研究で課題として残っている領域の1つは、「連語」「連語的形式」「複合的語構成（複合形態）」（従来の接続助詞・助動詞のみならず動詞他とも連合した接続表現全体）の研究である。

例えば、従来の品詞論的単位での研究対象となる古典語接続助詞は、次のような短い単位であった。

ば、ど、ども、て、に、つつ、ながら、ものを、ものゆえ、ものから、して

一方、平安後期から増加していく複合型の接続機能辞は、例えば以下のように長くなる。

① につきて、②につけて（も）、③にしたがひて、④にとりては、⑤にまかせて、⑥にまして、⑦てのちは、

⑧のちよりは、⑨をはじめとして、⑩よりほかに、

この後者のような、複合型の接続機能辞の研究は、現代日本語では近年研究が進展していた。一方で、古典語での研究は、これまで個別には行われてきているが、平安時代全体を俯瞰できるような規模での調査もデータベース作成もなく調査は遅れていた。従来とは異なる「長い単位」で、接続機能をもつ表現形式を収集してデータベースを作成しつつ、その形態的変遷と、意味機能の変遷を、まったく新たに調査していく必要があった。研究の主たる目的は、次の2点である。

◆（1） 古典日本語（平安時代和文資料）における複合接続機能辞の形態的機能的な歴史の変遷を記述的に明らかにすること。

◆（2） 平安時代内の前半後半における複合型接続機能辞の量的・質的变化を解明すること。

2 研究成果

2ーア 研究資料・研究論文

○安部清哉・菊池そのみ・江口匠・大浜弘樹（2017.3）「【調査資料】平安前期の複合辞・連語機能語（複合連語機能辞）の現代古典対照—『竹取物語』での形態と用例—」『学習院大学国語国文学会誌』60, pp. (1)－(18) (116－99)、査読なし

○安部清哉（2017.3）「類義連語表現の文型形式から見た構文の類型について——連語構文類型構造論のための覚書——」『鈴木泰先生古希記念論文集』, pp. 87－99、国際連語論学会編（日本文法研究会発行）、査読なし、

2ーイ 研究の発展

○2017年度科研費に採用され（2017～2019年度基盤研究（C）（代表・安部）、そちらに継続となった。

基盤研究（C） 研究課題：「古典日本語の連語構成・詞辞複合表現形式の通時的基礎研究」

2ーウ 作成資料（データベース）

- ① 『竹取物語』の接続機能語のデータベース、② 『夜半の寢覚』の接続機能語のデータベース

3 作成データベース（DB）による研究の発展

細部は略すが、2作品『竹取物語』『夜半の寢覚』によって、接続機能語の意味・機能と語形形式ごとに、古典語用例とその現代語訳とを対照できるようにした対照一覧表を作成している。これをより多くの古典作品にて集積していくと、例えば以下のような傾向がわかるようになる。

現代語の「ことになる」と「ことになっている」という連語に対応する古典語の形式を見ていくと、以下のようなものが対応していることがわかる。

○現代語連語—「ことになる」、「ことになっている」

○古典語連語—「べし〜」（5例）、「こと〜」（4例）、「こそ〜已然形」（3例）

（古典語連語の全形式一覧——「こそ〜すれ」（例：にこそ寄せんずれ）、断定形（終止形）（おろかなり）、「ことか」「ことかな」「こと|に」「断定形」「なむとす」「にこそあれ」「べきことにか」「んずるぞ」「ことである」「ば（べければ）」「べき」「べけれ」「べし」「わざなり」

具体例を1組挙げると以下のようなものである。

用例（1）「ことになる」＝「こそ〜すれ」〈にこそ寄せんずれ〉

「ここで鳥ないては、六波羅は白屋にこそ寄せんずれ。いかがせん」⇔「ここで鳥が鳴いては、六波羅へは白屋に寄せることになる。どうしたらよからう」『寢覚』

現代語の「ことになる」と「ことになっている」に対応する古典語の形式で、用例が多いものは、「べし〜」（5例）、「こと〜」（4例）、「こそ〜已然形」（3例）であり、対応には一定の傾向があることが明らかになる。現代語では消滅した「べし」の機能、係助詞「こそ」による表現は、現代語（近世以降か？）では「ことになる」「ことになっている」という表現が担うような機能であった、ということをこれらは新たに教えてくれるわけである。

これらのような対応関係は、従来のような研究手法では見出せていないものであった。今後の研究が期待される領域と考える。（*本篇の論文の方の「4」章にも組み込んでいる。）

以上